

## 吳昌碩と『吳氏宗譜』

著者	松村 茂樹
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	51
ページ	201-206
発行年	2019-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006720/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006720/</a>

## 呉昌碩と『呉氏宗譜』

【キーワード】 呉昌碩、家譜、呉氏宗譜、修譜大屋、読書人

### 修譜大屋とは

二〇一八年八月四日、筆者は、清末民初の上海書画壇で活躍し、詩書画印四絶を以て「中国最後の文人」と称される呉昌碩（一八四四―一九二七）一族の故郷である浙江省安吉県鄣呉村を訪ねた。これは筆者にとって二〇一六年八月一日に赴いて以来、二回目の訪問である。前回は、呉昌碩故居と衣冠塚を訪ね、これらについて拙稿「呉昌碩の旧址を訪ねて」（『コミュニケーション文化論集』第十五号 二〇一七・三・一八 大妻女子大学コミュニケーション文化学会 所収）で論じた。今回は、前回行けなかった修譜大屋を訪ねるのが目的である。

修譜大屋は、呉昌碩が一八九五年から三年をかけて、一族の家譜である『呉氏宗譜』を重修したところである。王季平主編『呉昌碩和他的故里』（二〇〇四・一〇 西泠印社出版社）「呉昌碩「修譜大屋」史話」に、以下のようにある。

松村茂樹

これはやはり『呉氏宗譜』から話さねばならないだろう。伝えるところによると、南宋の初年、この地に始めて移ってきた呉氏の先祖である呉瑾（一九世）が鄣呉に居を定めた際、原籍の淮安から「銅譜」を携えて来ていた。「銅譜」とは何か？ それは紙のように薄く伸ばした銅箔に文字を刻して作った家譜で、虫に食われず、火にも燃えず、世代代保存できるのだ。七百余年来、それはずっと呉氏宗祠の内に供えられていたが、清末の咸豊年間、戦乱のため、族人は銅譜を後山（鳳麟山）に埋め、戦後に探したが、すでに行方知れずになっていた。昔は、家譜は祖宗の神霊を意味し、家譜を失うことは祖先を失うことであるため、ひたすら家譜を想う族人は皆心にかかっていた。このことが遠く上海にいた呉昌碩の知るところとなり、彼もとても気を揉み、光緒二一（一八九五）年、母を見舞う帰郷の機会を借りて、族中の長老と何度も協議した後、彼を長とする宗譜編纂委員会が成立し、「共にその事を成した」のである。この時、ちょうど村の魯という姓の家が没落し、新築の大屋を売りに出していた。そこで呉昌碩は、八百元の銀貨で購入し、宗譜を続修する場所とした。そこで、呉

昌碩は族中の長老と一緒に、資金を集め、人手を求め、「その生卒を探訪し、その年歳を考証し、その支脈を分ち、その遺事を捜緝した……」（呉昌碩撰「重修宗譜序」）。この新築の大屋の中で、一年近く忙しく仕事し、遂に三年後（光緒二十四年、西暦一八九八年）の春三月に大事が成ったのである。この厚きこと十大冊に達する『呉氏宗譜』の中には、完全にして系統的に、宋、元、明、清七百余年間の呉氏家族の移転、定住、発展、隆盛と分脈が記載されている。用いた史料は精確で依るべきものであるため、高い史学価値を具えている。とりわけ、呉昌碩が手ずから撰した「呉氏列祖諸伝」は、後人が呉昌碩の家世、生涯を研究する上で、殊に貴重な第一級資料となっている。

このような経緯で、呉昌碩が購入したこの修譜大屋において、呉昌碩の主修により、『呉氏宗譜』が重修されたのである。

### 修譜大屋を訪ねる

前述の通り、二〇一八年八月四日、郭呉村に着いた筆者は、修譜大屋の場所を聞くため、まず、呉氏第二十五世（呉昌碩は第二十二世）の呉建六氏を、その経営になる扇子店・建築扇廠に訪ねた。

呉建六氏には、二〇一六年に訪れた際にもお会いし、ご所蔵の呉昌碩主修『呉氏宗譜』複印本をお見せいただいた。その後、『呉氏宗譜』は続修がなされ、新版が刊行されたという。呉建六氏はそれ



建築扇廠にて呉建六氏夫妻と

を出して来てお見せくださり、ご自身とご子息が載っている頁をお示しくくださった。この新版は、ご子息の代である第二十六世まで記載されているという。

筆者が修譜大屋の場所を聞くと、連れて行ってくださるというので、お言葉に甘えることにした。

建築扇廠を出て程なく、呉建六氏は、ここが以前、呉氏宗祠があった場所だとお教えくださった。今は、何一つ当時の名残はないが、その壮大さはかろうじて偲ぶことができる。

呉氏宗祠跡の横道を、呉建六氏の先導で歩く。郭呉村は近年、観光地として整備が進み、白壁に石畳の小道がとても瀟洒である。

五分ほど歩いて修譜大屋に着く。「浙江省文物保护单位」であることを示す石標があり、そこには「呉昌碩故居」とある。前出「呉昌碩「修譜大屋」史話」にあるように、これは呉昌碩が購入した家屋であるから、「呉昌碩故居」であることには違いない。ただ、呉建六氏に、呉昌碩はここに住んでいたのかと尋ねたところ、郭呉村滞在時は、村



修譜大屋への道



呉氏宗祠跡



修譜大屋門口



修譜大屋外壁と門口



修譜大屋石標



修譜大屋主楼内部



修譜大屋主楼入口



修譜大屋主楼

前出「呉昌碩「修譜大屋」史話」にも触れられているが、呉昌碩は、この重修『呉氏宗譜』の冒頭に「重修宗譜序」を書いている。まずは、これを読んでみよう（原文は、重修『呉氏宗譜』安吉文史館蔵本の該当部分を掲げた）。なお、「俊卿」は呉昌碩の名である。

### 呉昌碩「重修宗譜序」を読む



修譜大屋後面



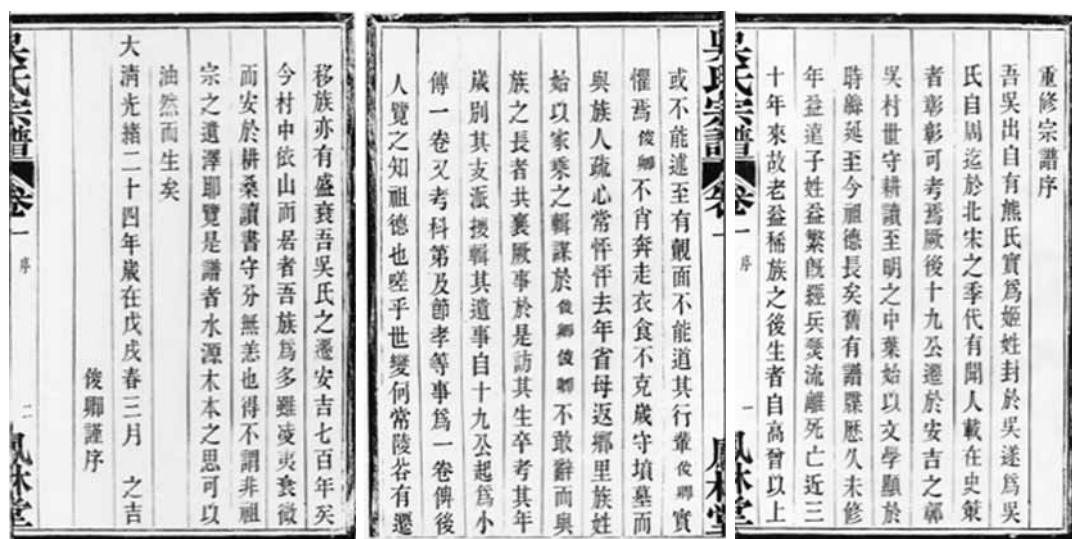
修譜大屋後面より主楼を見る

の中心部にある屋敷、つまり現在、鄞県村呉昌碩故居とされているところに住み、ここに通って修譜の仕事を指揮していたという。門を入り、中庭を通り、正面の主楼に入ると、中には、当時を再現して、筆写道具を上に置いた多くの机が並べられている。このような机で修譜が行われたのである。建物の後面に回ると、自然の山を借景にした見事な庭があり、そこから主楼を見ると、清代の素朴な中に意匠を凝らした建築様式であることがよくわかる。呉昌碩は今から百二十年前、ここで自ら主修として『呉氏宗譜』を重修したのである。

わが呉は有熊氏より出て、実は姬姓であり、呉に封じられ、かくして呉氏となった。周から北宋の末まで、代々有名人がおり、史書に載っている者は明らかに考証ができる。その後、十九世が安吉の鄧呉村に遷り、世々耕作の傍ら勉学に励み、明の中葉に至って始めて文学を以って知られるようになり、今に至るまで先祖の遺徳は続いている。以前より家譜はあったが、久しく修訂されていなかった。年が下ると共に、子孫は増えたが、兵乱（太平天国の乱）を経て、流離死亡した。近三百年來、故老は少なくなり、一族の若者は高祖より以上を述べられなくなり、会ってもその世代を言えなくなつて、俊卿は実に危惧の念を抱いている。俊卿は不肖者で、衣食のために奔走しており、年毎の墓参りもできず、族人と疎遠になつていて、心は常に落ち着かない。去年、母の見舞いに郷里に帰つた際、同姓の親族が始めて家譜の編纂を俊卿に諮り、俊卿は敢えて辞せず、一族の長者と共にその事を成したのである。そこで、その生卒を探訪し、その年歳を考証し、その支脈を分ち、その遺事を搜緝して、十九世よりの小伝一卷を作り、また、科挙受験および貞節孝行の一卷を作つた。後人がこれを見て祖徳を知るであらう。ああ、世は常に移り変わつており、高い丘が深い谷になるように、一族もまた盛衰する。わが呉氏が安吉に遷つて七百年、今、村の中に山に依つて居住している者は、わが一族が多く、衰退していると雖も、耕作養蚕の傍ら読書をし、分を守つて恙なく過ごしているのも、祖先の遺沢でないと云えないことがあろうか。この譜を見る者は水源の大本への思いが油然而じて生じることであらう。

大清光緒二十四年、戊戌の年の春三月の吉日。俊卿が謹んで序を書いた。

自らの一族である呉氏のこと、修譜の経緯、現在の呉氏への思いが、簡潔ながらも情感を込めて書かれている。



吳昌碩「重修吳氏宗譜序」（重修『吳氏宗譜』安吉文史館藏本より）



## 当時の呉昌碩の状況

呉昌碩は、上記の序の中で、修譜の経緯を「去る年、母の見舞いに郷里に帰った際、同姓の親族が始めて家譜の編纂を俊卿に諮り、俊卿は敢えて辞せず、一族の長者と共にその事を成したのである」と書いているが、この「去る年」とは光緒二十一年（一八九五）年のことである。呉昌碩の孫・呉長鄴編写「呉昌碩先生年譜」（呉長鄴著、河内利治、北川博邦共訳『わが祖父呉昌碩』・一九九〇、三、二〇・東方書店所収／以下『年譜』と略称）に、以下のようにある。

一八九五（光緒二十一年 乙未）五十二歳

二月、継母楊氏の病が重り、至急の手紙で返ることを催促してきたので、遂に休暇を乞い南歸し、母を奉じて上海に來り頤養した。「画博古」の詩中に「從軍して楡関に至るも、未だ露布を書くを獲ず。母病みたれば亟かに南せんことを図り、母を奉じて海上に寓す」の句がある。（手稿による）

つまり、呉昌碩は、この前年「八月、呉大澂が師を督して北上し日本軍を禦がんとし、先生は國家を防衛する爲に、毅然として戎幕に參佐」（『年譜』）していたのである。この中日甲午戦争（日清戦争）従軍から、母の病氣により帰郷した際、『呉氏宗譜』重修の話が持ち上がったことになる。

この時の従軍に関しては、王家誠著『呉昌碩伝』（村上幸造訳・一九九〇、一〇、三一・二玄社）に詳述されているので、そちらに譲るが、呉昌碩にとって、人生最大の挫折と言っても過言でない経験であった。

この挫折から立ち直るべく、呉昌碩は友人を訪ねたり、出張の傍ら碑を見に行ったりしていることが、呉昌碩の詩集『缶廬詩』所収の詩

から窺える。それでも呉昌碩の鬱々とした気持ちは晴れなかったように、一八九八年、つまり『呉氏宗譜』重修が成った年に作られた「今我不樂」詩（『缶廬詩』卷四所収）に、以下のようにある。

耳聾目聾肝肺焦、一官病癢談風騷。

癖篆冷抱石人子、買花狂散金錯刀。

無弦独彈陶令隱、有錡且荷劉伶豪。

今我不樂歲月邁、短鬢一日千回搔。

〔耳は聞こえず目はくらみ肝肺は焦がれ、小官は病のために廃人となって風流放蕩を談じている。〕

篆刻の癖を寂しく抱く石人子は、花を買って狂おしく散財する。

無弦の琴を独り弾じる陶淵明の隠棲の気持ちもあるが、死ねば埋めよと従者に鋤を担がせた劉伶の豪気もある。

今私は楽しむことなく歲月は過ぎて行き、短い耳ぎわの毛を一日千回搔きむしる。〕

当時、呉昌碩の胸中は、かくのごとく荒んでいたのである。

## 読書人の家に生まれたら

この詩の中で、呉昌碩は自身のことを「一官（小官）」と称しているが、当時の呉昌碩は、自身を官途にある者と認識していたことがわかる。ただ、呉昌碩は、一八六五年、二十二歳の時、科挙の初期資格である秀才に補せられていた（『年譜』）が、その後、それ以上の資格は得ておらず、実際の官職に就くのは難しかった。それでも、当時の呉昌碩は小官とはいえ、官職に就き続けている。

浙江省博物館蔵の呉昌碩「詩文手稿冊」十三冊（資料番号21223）の第十冊（13-10）に、呉昌碩が自ら書いた「光緒二十一年（一八九五）年五月履歷」と題された履歷書の控えが残されている。ちょう

ど、中日甲午戦争従軍から戻り、『呉氏宗譜』重修の話が持ち上がった頃となろう。この中で呉昌碩は、「五品頂戴試用知県呉〇〇謹」と書き始めており、知県候補であったことがわかる。そして、これまでの官職を書き連ね、最後は、光緒二十一年二月に従軍から戻った後、同三月に「海運津局差」となっていることが書かれている。このような苦しい時にも、呉昌碩は、新たな官職を求めて履歴書を書かねばならなかったのである。

さすれば、呉昌碩はおそらくは人生で最も苦しい時に、『呉氏宗譜』重修を行ったことになる。しかも大金で以って修譜大屋を購入してまで。

前出の「重修宗譜序」の中で呉昌碩は、『呉氏宗譜』重修を頼まれた際、「俊卿は敢えて辞せず」と述べている。以前は栄えた呉氏（明代には四人、清代には二人の進士を出している）も、この頃には「衰退」しており、官途にあるのは呉昌碩だけであった。一族の期待は呉昌碩に集まっており、呉昌碩もその期待に応えたのである。

そして呉昌碩も、真摯に『呉氏宗譜』重修に当たるうち、一族の栄光を再認識したのであろう。かくして、苦しくとも、より大きい官職を求める活動に力を入れたのではないか。そして、光緒二十五（一八九九）年、江蘇安東県令に任じられることになる（『年譜』）。そして呉昌碩はこの官を一月で辞し、「一月安東令」の印を刻して、文人職業書画家として生きるのである。これはあたかも清の鄭板橋（一六九三—一七六六）が、知県を辞した後、「二十年前旧板橋」印を刻し、揚州で売字売画を行ったのに倣ったかのようであった。

呉昌碩は、晩年、職業書画家として成功しているため、官途には執着が無かったように思われがちであるが、清末の混乱期とはいえ、読書人の家に生まれた以上は、やはり官途に就き、一族の名声を継続させねばならない。呉昌碩もその責務を、苦しみながらも果たしたのである。